

## 日本社会における文化基層としての死生観とその変化 ——2015年／2022年意識調査結果から——

遠 藤 薫

### 1. はじめに一露出する死

われわれは、近代的理性の名のもとに、多少の浮き沈みはあるとしても、安定的で秩序だった民主主義社会へ向かって進歩してきていると感じていた。だが、近年、次々と世界を襲う災害、疫病、紛争は、そうした近代の信憑を根底から揺さぶり、人間存在がきわめて脆弱なものであることをわれわれに突きつけている。

例えば2011年3月11日に起きた東日本大震災・福島第一原発事故は、宇宙への移住をも考えるほどの先進科学技術時代にあつてさえ、自然の力の前に人間たちの命はあまりにも儂く容易に失われることを、私たちはまさにメディアを通してありありと見つめ続けたのだった。

また2019年末に中国で人間への感染が始まったとされるCOVID-19は、すでに人類によって制圧されたと考えられた感染症が、いまだ大規模な感染拡大を引き起こす力を潜在させていることを暴露した。「未知のウィルス」は、19世紀のペストや20世紀初頭のスペイン風のように、瞬間に世界中に拡がり、無防備な人びとをなぎ倒していった。著名人でも、罹患した数日後に家族にも看取られぬまま亡くなる有様は、11世紀の歌人の「朝に紅顔ありて夕べに白骨となる」<sup>1)</sup> という歎きを切実に思い起こさせた。

1) 平安時代中期の歌謡集「和漢朗詠集」に収められた藤原義孝の詩の一節「朝に紅顔あつて世路に誇れども、暮（ゆふべ）に白骨となって郊原に朽ちぬ」による。生死の儚いこと。

時間が巻き戻されたように露わになる死の氾濫の一方、先進諸国を中心に、少子高齢化と人口縮小社会への転換が起きている。とくに日本では、15～64歳人口（生産年齢人口）は1995年をピークに減少を始め、2020年時点で13.9%も減少した。総人口も2008年をピークとして下り坂に入った。一方、ひとり暮らしが増加し、単身世帯が全体の38%を占める「ソロ社会」が到来している。「ソロ社会」は、人は自らの死に一人でむきあう「孤死社会」であるかもしれない。われわれはいま、われわれ自身の〈死〉と〈生〉についてなお深く考える必要に迫られている。

本稿では、筆者が2015年5月および2022年6月に行った意識調査（以下、それぞれ「2015年5月調査」「2022年6月調査」と表記する）<sup>2)</sup>の比較分析にもとづき、日本社会における基層としての死生観とその変化についてまずは速報的に報告するものである。

## 2. 生きることは素晴らしいか—浮き世／憂き世という両義性

死の儚さを突きつけられるにつけ、私たちは生きていることを改めてかみしめる。例え富裕とはいえず、名誉や地位がなくとも、日々当たり前と意識にもほらない「生きていること」の貴重さが痛切に感じられる。「生きてさえいれば」という祈りのような言葉は、洋の東西を問わず、さまざまな作品の中でくりかえし語られてきた。

では、このような「生きていること」を人びとは日常的にどの程度感じているだろうか。図1に、2022年6月調査で、生きていることについての意識を尋ねた結果を示す。これによれば、「生きていることはとても素晴らしい、と思うか」という問いに対して、「まったくそうだと思う」が27.7%、「まあそう思う」が31.0%で、合わせて6割弱となっている。

ところが、「生きていることには辛いことも多い、と思うか」という問いに

2) インターネットモニター調査、2022年6月実施、全国の20～79歳男女、国勢調査に基づく都道府県別・性別・年代別割当、N=2103

対して、「まったくそうだと思う」が27.1%,「まあそう思う」が40.2%で、合わせて7割弱となっている。それはつまり、「生きていることはとても素晴らしい」と思うと同時に「生きていることには辛いことも多い」とも思う人がかなりいるということを意味している。この調査で言えば、「生きていることはとても素晴らしい」と答える人<sup>3)</sup>の84.9%が「生きていることには辛いことも多い」とも答えているのである。

仏教では、「生老病死（しょうろうびょうし）」すなわち、生まれること、老いること、病気になること、死ぬことの四つを人間として避けられない4つの苦しみと説いている<sup>4)</sup>。このような伝統的教えが日本人の世界観に染みついているのかもしれないし、あるいはまたとくに外部から与えられなくとも生活実感として心理的に感受されているのかもしれない。古来、日本の文芸には、このような感覚が吐露されることが多い。たとえば、「生老病死の移り来たること、またこれに過ぎたり」（吉田兼好『徒然草』）、「いのちは又無量なれば、つゐに生老病死のくるしみなし」（『栄華物語』（平安後期））、「我、若し生老病死・憂悲苦恼を不断ずは、終に宮に不返じ」（『今昔物語集』（平安後期））、「常楽我淨の顛倒と云ひ、生老病死の転変と云ひ」（貞慶『愚迷発心集』）、「いのちをうしなふものならば、しょうらうびやうしもあるべからず」（『曾我物語』（南北朝頃））「生老病死のくるしみは 人をきはぬ事なれば」（一遍『百利口語』）「生老病死の諸苦、性格の欠陥、あらゆる失敗、それを十分に噛みしめてみればそれでいいのだ（有島武郎『惜しみなく愛は奪ふ』）など枚挙にいとまがない。

またそれは、今生きている世の中を「うきよ」とよび、「憂き世」「浮き世」<sup>5)</sup>のダブルミーニングで使い慣わしている文化風土とも関係しているかもしれない。

こうした感覚とどのように関係しているか、短絡的にはいえないが、「ときどき「死にたい」ような気になることはあるか」という問いに肯定的に答え

3) 「まったくそうだと思う」と答えた人および「まあそう思う」と答えた人の合計。以下同。

4) 法華義疏二・譬喩品「見『諸衆生為『生老病死憂悲苦恼』之所<sup>上</sup>燒煮<sup>上</sup>」

5) 『日本国語大辞典』（小学館）によれば、「うきよ」とは、「〔一〕（多く「憂き世」と書く）つらい世の中。平安後期から中世にかけては無常観、また、穢土（えど）観など、仏教的厭世思想の色合いを持つことが多い。」「〔二〕（多く「浮き世」と書く）享乐的に生きるべき世の中。中世末・江戸時代初頭より、前代の厭世的思想の裏返しとして生まれたもの。」の二つの意味をもつ。

る人が3割を超えており、否定的な回答と同程度の割合いることも驚きといえる。「ときどき「死にたい」ような気になる」という感情は、「希死念慮」と呼ばれる漠然としたもので、「自殺願望」とはやや異なるともされる<sup>6)</sup>が、生に対してネガティブな感情であり、望ましいとはいえないだろう。特に気になるのは、「死にたい」ような気になることはあるか」という問いに肯定的に答える人の割合が、20-30代では38.5%、40-50代では32.1%、60-70代で22.2%と、若い層ほど極めて高くなっている点である。

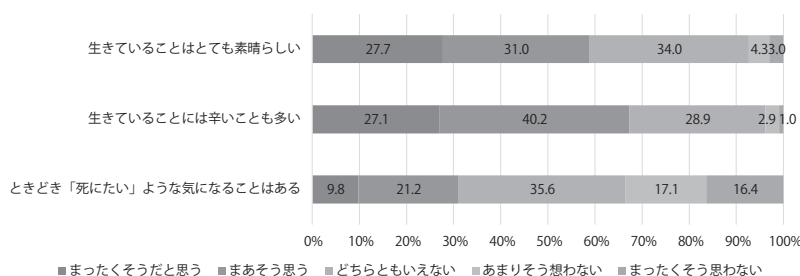


図1 生きていることについての意識（%，データ出所：2022年6月調査）

年代や性別による違いを見るために、回答を数値尺度化<sup>7)</sup>し、年代による平均値の違いを折れ線グラフとして著したのが、図2である。年代的に見ると、「生きることの素晴らしさ」も「生きることのつらさ」も年代が高くなるほど強く感じるようになるが、「死にたい気持ち」は、若年層の方が強く感じているようである。

性別で見ると、若い頃は「生きることの素晴らしさ」も「生きることのつらさ」も「死にたい気持ち」も女性の方が強く感じているが、年代が高くなると、男女の差は小さくなり、70代ではほぼ一致する。

6) 厚生労働省の「令和3年10月実施自殺対策に関する意識調査（N=2009）」によれば、「自殺を考えたことがある」と回答した人は全体の27.2%である。（<https://www.mhlw.go.jp/content/000887487.pdf> p.66）また、同報告書によれば、自殺を考えたことがある人の割合は年々高くなっている。

7) 各回答を、「まったくそうだと思う」を2、「まあそう思う」を1、「どちらともいえない」を0、「あまりそう思わない」を-1、「まったくそう思わない」を-2と点数化した値。

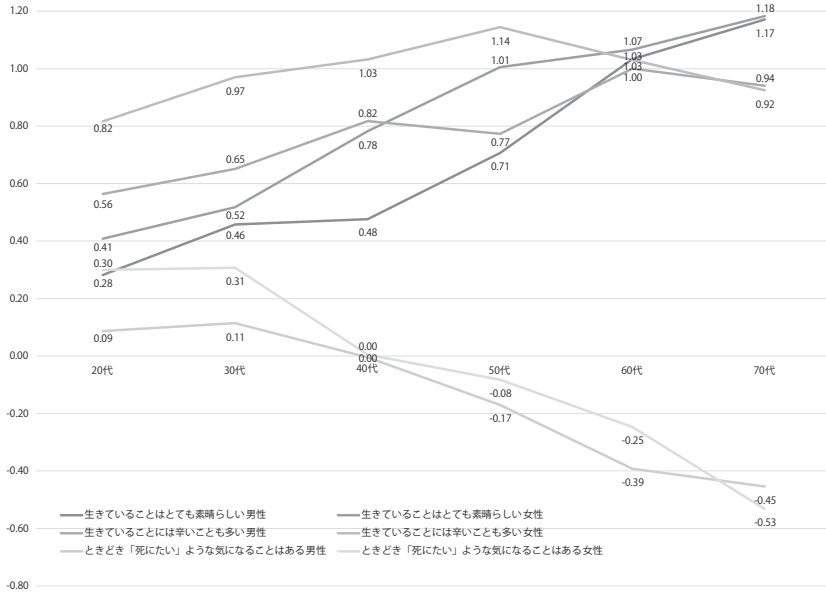


図2 生きていることについての意識（性別，年代別，％，データ出所：2022年6月調査）

### 3. 〈死〉ぬことは怖ろしいか

〈生〉の向こう側に〈死〉がある。ただし、生きている人間は〈生〉は体験できるが、〈死〉を体験することはできない<sup>8)</sup>。それでも、人間は、〈死〉というものを知っている。生きている人間が、いずれは誰もが死ぬことを知っている。「サルは母親は死んだ子ザルをずっと離さず、その遺骸がどこか道端に落ちて見失われてしまうまで、かき抱いたまま依然として運び続けることだろう。母ザルは、死について何ひとつ知らない。ゆえにまた子ザルの死も、自分の死も知らない。が、人間は知っている。死が人間にとって問題となる所以である」とノルベルト・エリアスは述べている（Elias1982=1990：8）<sup>9)</sup>。

8) Kubler-Ross, Elisabeth, 1969, OnDeath and Dying. (鈴木晶訳, 2020, 『死ぬ瞬間—死とその過程について』中公文庫) は、約200人の臨死患者に聞き取りし、まとめたものである

9) ただし、松沢・林2010によれば、チンパンジーなどでも弔いの意識の芽生えが見られるという、

人間は、人間にとって〈死〉が不可避であることを知っていると同時に、〈死〉がいつ訪れるかを知らない。江戸期の山本常朝<sup>10)</sup>が著した『葉隠聞書』には「常住死身」すなわち「つねに死を覚悟して生きること」を理想としてあげているが、多くの人間は、〈生〉がいつ〈死〉に反転するのか、(通常は無意識であるにせよ)、ふと省みればその不確定性におびえざるを得ない。

さらにまた、人間は、他者の死に逝く様や死後の姿を見ることはできる。他者の死は、幸福な死<sup>11)</sup>であることもあろうが、「苦悶する死」や「孤独な死」であることも多い。「家族に大きな負担をかける死」や「遺族を困窮に陥れる死」であることも稀ではない。自分にどの「死」が与えられるかを自分でコントロールすることはほぼ不可能であることを人間たちは知っている。

こうしたさまざまな事由が、「死は怖い」と感じさせる。

図3に、「死は怖い、と思うか」という2015年5月調査、2022年6月調査の質問に対する回答の割合を示した。これらによれば、2015年、2022年とも「怖い」と感じるのはおよそ6割で変化がない。

「死は怖いのか(死の恐怖)」を年代別・性別に見る(図4)と、男性では若年層から高齢層になるに従い、死の恐怖を感じる人の割合が高くなる。女性は全年齢で死の恐怖を感じる人の割合はほぼ一定している。高齢層では、男性と女性で死の恐怖を感じる割合はほぼ同じレベルとなるのが興味深い。

「死の恐怖」の原因としては、先に見たように、①死の不可体験性、②死の不可避性、③死の不確定性、④死の災禍性を挙げることができるだろう。さらに加えて、⑤死による世界からの排除、を挙げることができる。死に至る病を抱えたものが人でさんざめく街を歩くとき、その人が感じるのは、自分が死んだ後もこの世界は継続するにもかかわらず、自分自身はその世界から絶対的に排除されている、という底なし沼のような孤独感だろう<sup>12)</sup>。この感覚

10) 1659-1719

11) どのような死が「幸福」であるかは、見るものに主観にゆだねられるだろうが。

12) もっとも、エリアス(34)は、「この問題は、生命活動の究極的停止…(中略)…だけに関わる問題ではない。多くの人は徐々に死んでゆくのだ。弱くなり、老いてゆくからである。…(中略)…老人や死を迎えつつある人々が活動的な共同体から暗黙のうちに隔離されてしまうこと、

日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——はしばしば「死んだらすべて終わりだ」と表現される<sup>13)</sup>。この表現に関する意識調査の結果も、図3、図4に示されている。図3で、2015年と2022年の結果を比較すると、2015年で「まったくそう思う」と「まあそう思う」を合わせた（以下、「そう思う」と略記）割合は約7割であるのに対して、2022年は約6割とかなり下がっている。ただし、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせた（以下、「そう思わない」と略記）割合も減少しており、「どちらともいえない」が増えている。そこから考えると、大きな変化はないといえるかもしれない。

「死んだらすべて終わりだ」と対立的な死生観は「死後の世界がある」であろう。前者が合理主義的あるいは即物的な死生観であるとすれば、後者は宗教的あるいは観念的な死生観といえよう。図3に示すように、少なくとも現代では、「死後の世界がある」に対してそう思うという回答の割合はおよそ4分の1と少数派である。2015年に比べて2022年は減少しているようだが、これも「どちらともいえない」が増えたせいと考えられ、大きな変化はない。性別・年代別で見ると（図4）女性の方が男性より「そう思う」割合がいずれの年代層でもかなり高い。また若年層から高年層になるにしたがって、「死後の世界」を信じる割合は減っていくことがわかった。

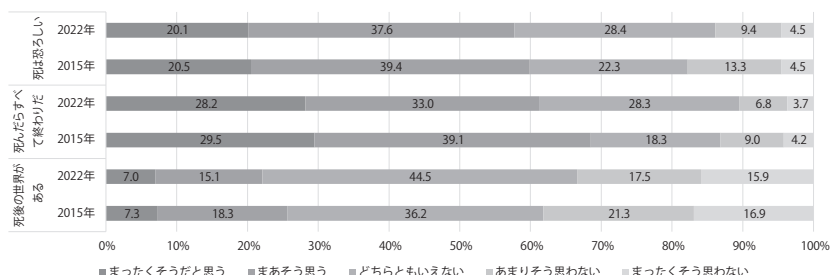


図3 〈死〉の感覚（％，データ出所：2015年5月調査，2022年6月調査）

好意を寄せている人々と永年にわたって築いてきた親密な間柄が徐々に冷却してゆき、大切な人、安心感を与えてくれる人たちの全部から遠く離れてしまうこと—— …（中略）…これほど辛いことはないのである」と指摘している。

13) ただしこの表現がある種の〈救済〉を意味することもあることに留意する必要がある。

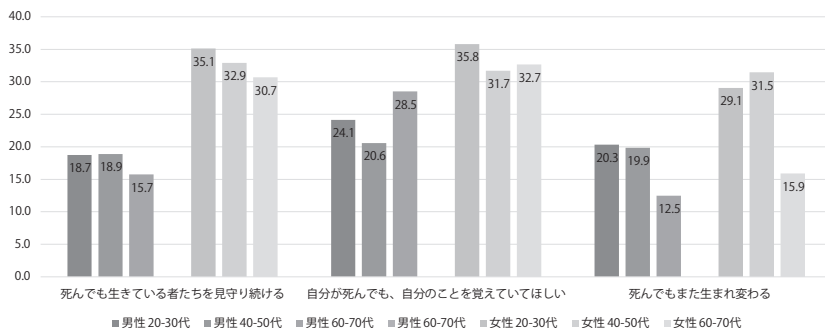


図4 〈死〉の感覚

(まったくそうだと思う + まあそう思う, %, 年代別, 性別, データ出所: 2022年6月調査)

さてでは、これらの死生観は、「死の恐怖」と何らかの関係を持っているだろうか。

まず考えられる第一の仮説としては、「生の素晴らしさ」を感じる人ほど「死の恐怖」も強く感じる」が考えられる。「生の素晴らしさ」についての回答と「死の恐怖」についての回答をクロス集計したグラフが、図5の右端である。これによれば、確かに、「生の素晴らしさ」を感じる人ほど「死の恐怖」も強く感じる」と考えられる。(回答を数値尺度化(変数化)したときの相関係数は0.314であった)。

第二の仮説としては、「死んだらすべて終わり」と感じる人ほど「死の恐怖」も強く感じる」が考えられる。「死んだらすべて終わり」についての回答と「死の恐怖」についての回答をクロス集計したグラフが、図5の中央である。ここでも、確かに、「死んだらすべて終わり」と感じる人ほど「死の恐怖」も強く感じる」と考えられる。(回答を数値尺度化(変数化)したときの相関係数は0.458であった)。

第三の仮説としては、「死後の世界がある」と思う人ほど「死の恐怖」は感じない」が考えられる。「死んだらすべて終わり」と対立する考えなので、「死の恐怖」を緩和すると推測されるからである。「死後の世界」と「死の恐怖」についての回答をクロス集計したグラフが、図5の左端である。ところが、想



日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——

定とは異なり、それほど大きな差ではないが、「死後の世界がある」と感じる人の方が「死の恐怖」も強く感じる」という結果がでた。（回答を数値尺度化（変数化）したときの相関係数は0.090であった）。ただし、「死後の世界がある」と答えた人と「ない」と答えた人のなかで「死の恐怖」を感じる人の割合の差は小さく、しかも「どちらともいえない」と答えた人のなかでの割合が最も小さかった。また、「死んだらすべて終わり」と考える人のなかでの「死の恐怖」を感じる人の割合と比べると、「死後の世界がある」と考える人のなかでの割合は小さかった。この結果は、確かに、「死後の世界」があると考えてることによって「死の恐怖」が緩和される場合もあるが、宗教の説く「死後の世界」には天国と地獄の双方があり、もし地獄へ堕とされるとすれば、それは「虚無の死」よりもさらに怖ろしいと感じられる、といった心理が関係しているのではないだろうか。

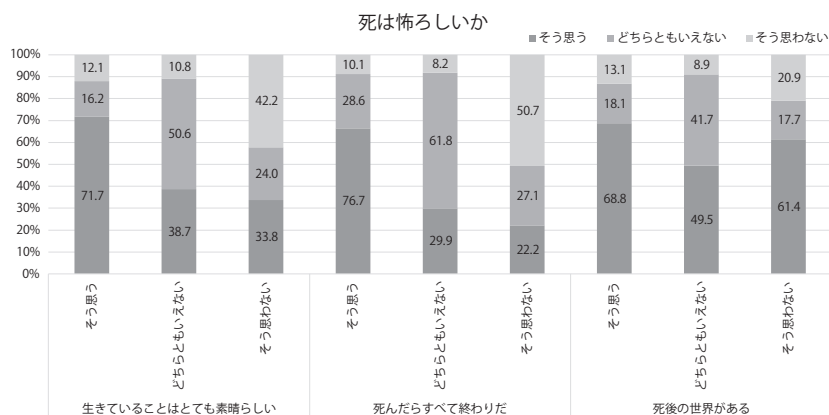


図5 死の恐怖と死生観の関係（そう思う：まったくそうだと思う＋まあそう思う，そう思わない：まったくそう思わない＋あまりそう思わない，%，年代別，性別，データ出所：2022年6月調査）

## 4. 生き遺る者たちへの想い

人は、自らの死を想うと同時に、自分の死後に遺る者たちへの想いを抱く

こともある。図6に、「生き遺る者たちへの想い」に関する質問調査の集計結果を示す。2015年の結果と2022年の結果に大きな違いはない(2022年の方が「どちらともいえない」の割合が大きくなっている)。4分の1強の人が「死んでも生きている者たちを見守り続ける」と答え、約3割の人が「自分が死んでも自分のことを覚えていてほしい」と答えている。

生き残る者たちを「見守り続ける」と答えた人は、〈死〉について「死んだらすべて終わりだ」と回答している者のなかでも27.4%いる。〈死〉に対して合理的に対峙しようと考えている人も、その〈生〉の世界への想いはつねに曖昧に揺れ動いているのかもしれない。

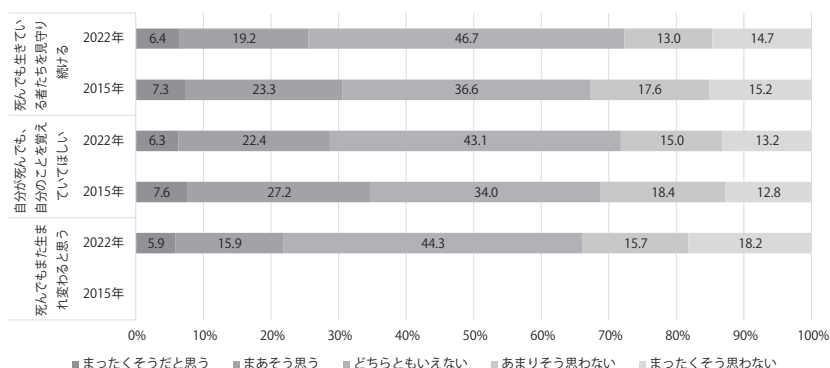


図6 生き遺る者たちへの想い  
(%, データ出所：2015年5月調査, 2022年6月調査)

「生きている者たちへの思い」を年代別・性別に見る(図7)と、いずれの項目でも、女性の方が男性よりも「そう思う」割合が高い。「死んでも生きているものを見守り続ける」と「死んでも生まれ変わる」について、男性は、若年層と中年層ではほとんど変わらず、高齢層になるとがくんと低くなる。女性は、男性では若年層から高齢層になるに従い、死の恐怖を感じる人の割合が高くなる。女性は「死んでも生きているものを見守り続ける」については年代とともに「そう思う」割合が低くなるが、「死んでも生まれ変わる」については男性と同様、若年層と中年層ではほぼ同じで、高齢になるとがくん

日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——と下がる。これらどちらかという観念的な想いは、実際に〈死〉が間近になるとリアリティを失うのだろうか。他方、「自分が死んでも自分のことを覚えていてほしい」という想いは、男性も女性も、夢想的な若年層で高く、中年層になると低くなり、願いが現実味を帯びる老年期で再び高くなっていると解釈できる。

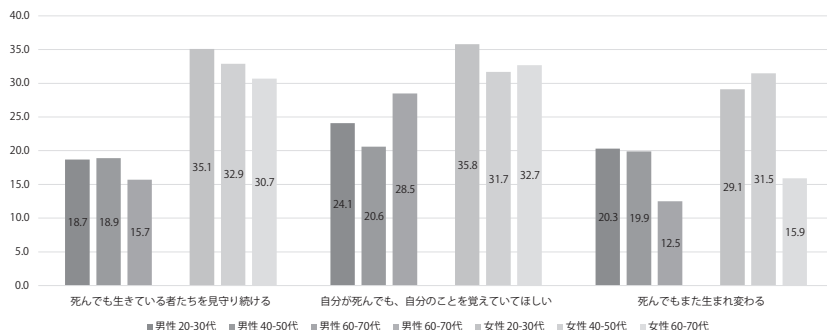


図7 生きている者たちへの思い（年代別，%，データ出所：2022年6月調査）

## 5. 生者たちと〈死者たち〉

### 5.1 〈死者たち〉の記憶

日本においては、柳田国男（1946）や折口信夫（1927）らがつとに指摘しているように、「先祖」（死者）を祭ることによって死と生を接続し、生の意義付けがおこなわれてきた。端的に言うなら、近世までの日本においては、〈死〉は絶対的なものではなく、〈生〉の彼岸への移行であり、したがって、死者たちはそこからつねに生者たちの世界を見守っている。彼らは盆には彼岸から此岸へと立ち戻り、生きている者たちの歓待を受けると考えられてきた。それは、土居（2007）が、死者に対する「くやみ」を「甘えの心理の延長上にある」（203）と指摘したことともかかわる、日本人の心性の基層にある感情であるかもしれない。本稿でここまでみてきたことから、日本人には死んでからも生きている者たちとのつながりを保とうとする心理が潜在しているようである。

では、「将来死ぬ者＝現在生きている者」は、「先に死んだ者＝先祖」をどのように遇しているだろうか？図8によれば、2022年6月時点で、「自宅に仏壇や神棚がある」との回答が約4割、「先祖代々の墓がある」との回答が約6割、「盆や彼岸には墓参する」が約5割、「親戚が集まって法事をする」が約4割となっており、先祖を祀る慣習が現在もかなり行われていることがわかる。ただし、2015年5月調査と比較すると、いずれも1割程度減少しており、先祖への配慮が衰退しつつあることも確かである。

また、2022年6月調査で、「先祖をよく知っている」と答える人は二割弱、「先祖についてよく知りたい」との回答が3割強、「亡くなった近しい人のことをよく語り合う」との回答は三割弱で、多いとはいえない。しかもこれらも、2015年5月調査と比較すると1割程度減少している。

NHKでは、2008年から、「ファミリーヒストリー」という著名人のルーツを探る番組を不定期に放送しているが、それも裏を返せば、「先祖」とのつながりがもはやしっかりと継承されなくなった時代を現しているといえよう。

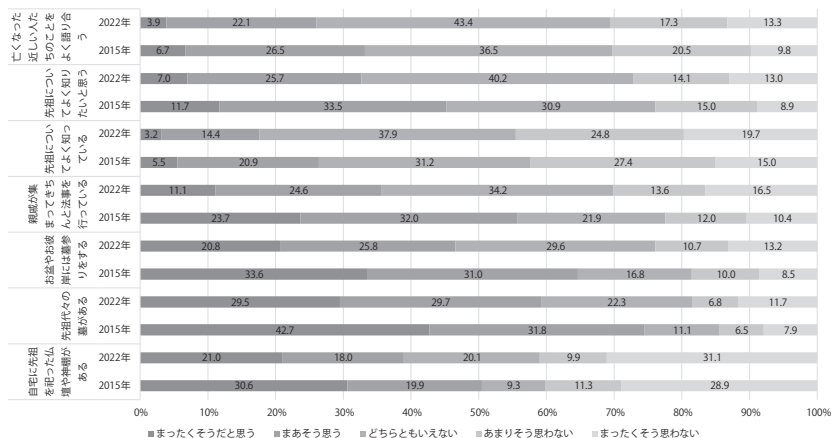


図8 先祖に対する意識（％，データ出所：2015年5月調査，2022年6月調査）

## 5.2 生者たちの世界と死者たちの世界の境界

生者の世界と死者たちの世界を開かれた空間においてつなぐのは〈墓〉で

日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——  
ある。

歴史上、墓制はくりかえし変化してきた。したがって一概に言う事は出来ないが、古い形式としては集落の墓地に弔う形が多く、また江戸期以降は寺檀制度にのっとり、檀那寺に設けられた先祖代々の墓に合葬される形式が多いと考えられる。

しかし、近代以降、特に戦後は、多くの人びとが先祖代々の土地を離れ、都市部に集住するようになった。人びとは先祖代々の地縁共同体から脱埋め込み（Giddens 1990）され、自分が選択した土地に「余所者」（Simmel 1992）、「故郷喪失者」（Berger&Berger 1973）として住むこととなった。必然的に、「死者たちの共在」の場としての墓のあり方も変わる。

図9に示したのは、2015年5月調査と2022年6月調査による「家族の墓」の状況だが、やはり先祖代々の墓をもっているという回答が最も多い。図10に示すように、2022年6月調査によれば、先祖代々の墓があるという回答が5割を超えている。ただし、2015年と比べると、遠方の先祖代々の墓があるという回答はほぼ横ばいだが、近くに代々の墓がある人はかなり減っている。居住の流動化によるとも考えられる。

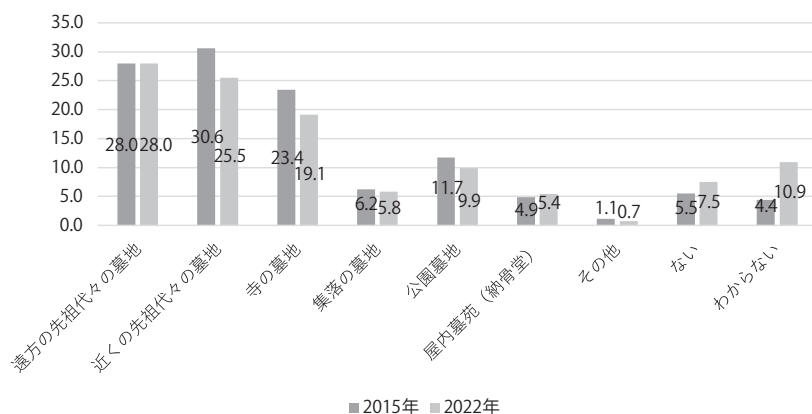


図9 家族の墓の現状（複数回答，%，データ出所：2015年5月調査，2022年6月調査）

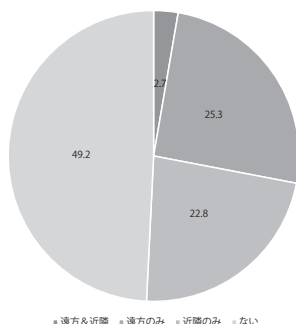


図10 先祖代々の墓があるか (%，データ出所：2022年6月調査)

では，現代人は自分の墓についてはどのような希望をもっているだろうか？図11によれば，やはり「先祖代々の墓」に入りたいという回答は少なくはないものの，最も多いわけではなく，減少傾向にある。最も多かった回答は「家族と一緒にの墓」で，約3分の1を占めている。核家族化の潮流を現しているといえるが，これも減少傾向である。2022年6月調査では，「先祖代々の墓」(20.4%)を抜いて，二番目に回答が多かったのは「散骨」(27.8%)，4番目に多かったのは「樹木葬」(17%)であった。これらは個人としての「葬り」であり，「墓」を残さないという選択である。今日では，「核家族化」の段階を超えて「個人化」の傾向が主流になってきたことを示唆している。

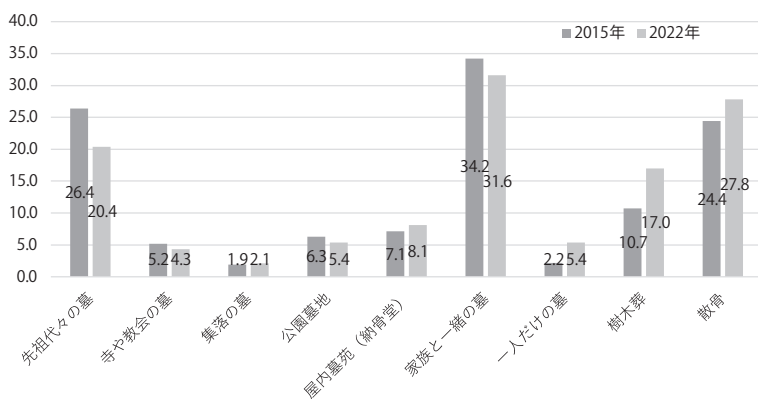


図11 自分の墓に関する希望 (%，データ出所：2015年5月調査，2022年6月調査)

## 6. 〈葬儀〉に対する意識は変化しているか

人が亡くなれば、墓に葬る前に、弔いの儀式——葬儀を行う。

かつて、葬儀の盛大であることは、その人の一生の掉尾を飾る勲章のようなものだった。どれだけ多くの新聞にどれだけ大きくその死が報じられるかは、遺されたものたちのアイデンティティにとって重要な意味をもっていた。

たとえば、2000年頃だったと思うが、ある学会で長年会長を務め、その領域で大きな影響力を持っていたある方の葬儀は、都下の格式ある菩提寺で多数の弟子たちによって厳かに営まれた。大きなターミナル駅から数百メートルの葬儀場まで、道の角ごとに提灯と案内板をもった黒服の男性たちが立っていたが、そんな案内も必要ないほど膨大な数の参列者たちが道を埋めていた。境内も参列客でごった返しており、いくつも設えられた大きなテントでは、手伝いの人たちがせわしげに煮炊きをしており、軽食を振る舞っていた。供花や花輪が所狭しと立てられ、学界の重鎮たちだけでなく、政治家や企業の名前も並んでいた。境内に入って弔問者たちの列に並び、焼香を済ませるだけでも1、2時間はかかるほどだった。

しかし今では、そんな盛大な葬儀はほとんど見かけなくなった。年若い人たちに話すと、異世界のこつのように驚かれることさえある。

最近、社会的にもよく名前の知られた先生方何人かの訃報に接したが、知ったのは亡くなられてかなり経ってからであり、葬儀はご家族だけですませたので、弔問や香典などもご辞退したい、とのご意向が伝えられることも多い。

図12に示した調査結果を見ても、「できるだけ盛大な葬儀」を望む人は、2015年でも7.8%、2022年になると1.6%まで減っており、もはや絶滅危惧種である。突出して多いのは、「きわめて親しい人だけによる葬儀」で、2015年調査では61.9%がそのように回答している。ただ、2022年にはそれも55.8%にさがり、替わって増加したのが、「葬儀はしてほしくない」という回答で、2015年の21.1%から2022年には32.2%に増えている。

ここにも、「核家族化」からさらに「個人化」へという潮流が観察される。

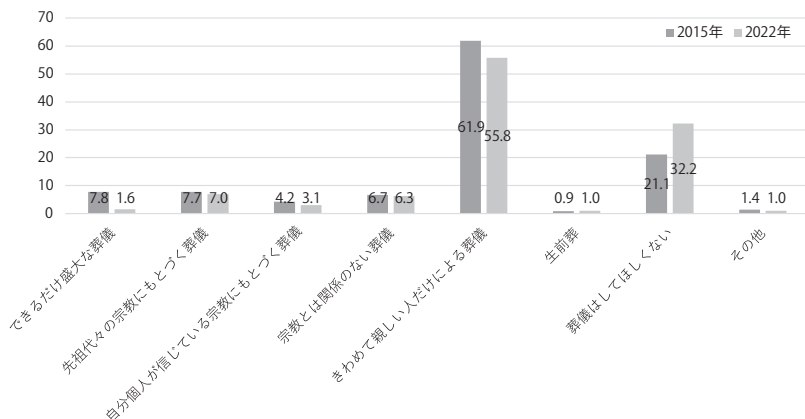


図12 自分の葬儀に関する希望（％，データ出所：2015年5月調査，2022年6月調査）

## 7. 地域とのかかわり合い

墓や葬儀の変化は、個人や家族と地域とのかかわり方の変化によるものでもある。先にも述べたように、かつては、墓は集落の墓地や檀那寺の墓地など近隣共同体に埋め込まれた〈場〉に立てられたものであった。また、葬儀もまた、近隣の人びとの支援のもとに行われたものだった。

たとえば、1990年前後に亡くなった筆者の祖父は、横浜の市井に生きた一人であり、99歳で亡くなる前の数年は寝たきりの状態だった。（しかも、横浜に越してきたのは戦後のことである）。それでも亡くなったときは、遠方の長いこと交渉のなかった人たちを含めた親類縁者はもとより、仕事でいささかでも関係のあった人びと、近隣の人びとが、さして広くない自宅に立錫の余地もないほど集まり、町内の人びとが総出で葬儀の段取りを仕切り、弔問客をもてなした。通夜から葬儀まで、たくさんの人たちが酒を酌み交わしながら夜通し祖父の思い出を楽しげに語り合っていた。

しかし、祖父とずっと同居して最期を看取った叔父が2000年代半ば頃に同じ家で亡くなったとき、その葬儀は家族だけでひっそりと営まれた。叔父やその



日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——  
兄弟姉妹たちがすでに90・80代に達しており、活発に動くことができなくなっていたからでもあり、その子どもたちの生活は、地域とはかかわらない仕事によって強く制限されていた。近隣共同体といえるような関係性はわずかな時間の間に消えていったように思われる。

現在の「近隣共同体」の最も一般的な形は、町内会とか自治会と呼ばれる地縁組織であろう。2007年版（平成19年版）『国民生活白書』<sup>14)</sup>によると、自治会・町内会などの主な活動分野は、「区域の環境美化、清掃活動、リサイクル活動」「住民相互の連絡」「盆踊り、お祭り、敬老会、成人式などのイベント」「行政からの連絡」「防災活動」などであるが、2007年時点で自治会活動に参加している人は48.5%<sup>15)</sup>であるとしている。しかし、内閣府「住民自治組織に関する世論調査」（1968年）によれば、1968年には、町内会/自治会に、町村部で90.3%、市部で88.5%が加入していた<sup>16)</sup>。また、2015年5月調査によれば町内会に参加しているのは46.5%、2022年6月調査では37.5%（図13）と、減少

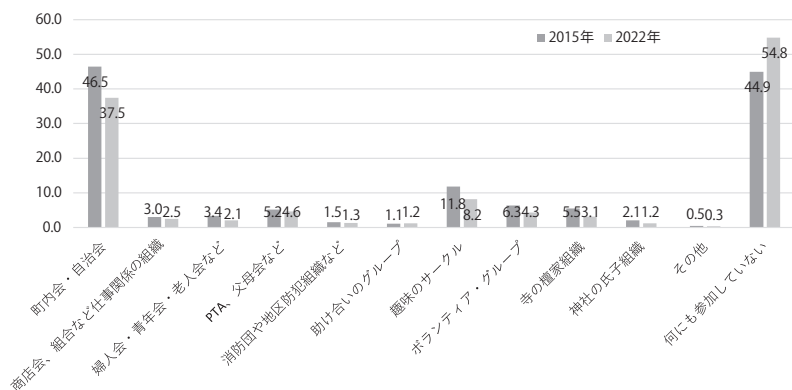


図13 地域の組織や団体への加入率  
(%, 複数回答, データ出所: 2015年5月調査, 2022年6月調査)

14) [https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9990748/www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10\\_pdf/01\\_honpen/index.html](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9990748/www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/index.html)

15) 「参加していない」という回答が51.5% (p.68)

16) 『平成22年版 情報通信白書』 <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h22/html/md121200.html>

傾向が続いている。地縁組織としては、自治会以外にも商店会や老人会などさまざまなものがあるが、現在では参加率は極めて低い。反対に、いかなる地縁組織にも属していない人が、2015年5月調査によれば町内会に参加しているのは44.9%、2022年6月調査では54.8%と大きく増加している。

この状況を年代別に見たのが、図14である。これによれば、容易に予想されたとおり、「町内会/自治会に参加している」との回答は、年代と強く相関しており、70代では71.9%に達しているのに対して、20代では10.1%ときわめて少ない。反対に、「何にも参加していない」との回答は、年代と負の相関関係にあり、70代では21.0%だが、20代では77.0%に達している。

また、居住地別に見たのが、図15である。これによれば、「町内会・自治会に参加している」という回答の割合は、東京都心で約2割と最も低く、規模が小さくなるにつれて高くなるが、地方都市（政令指定都市を除く県庁所在地）で最も高い6割となり、中都市以下ではすべてほぼ4割と大きな違いはない。

反対に、「何も参加していない」という回答は、東京都心で7割弱と最も高く、規模が小さくなるにつれて高くなるが、地方都市で最も低い4割弱となり、中都市以下ではすべてほぼ5割前後と大きな違いはない。

さらに、「地域の祭りには積極的に参加する」という回答も、地方都市を頂

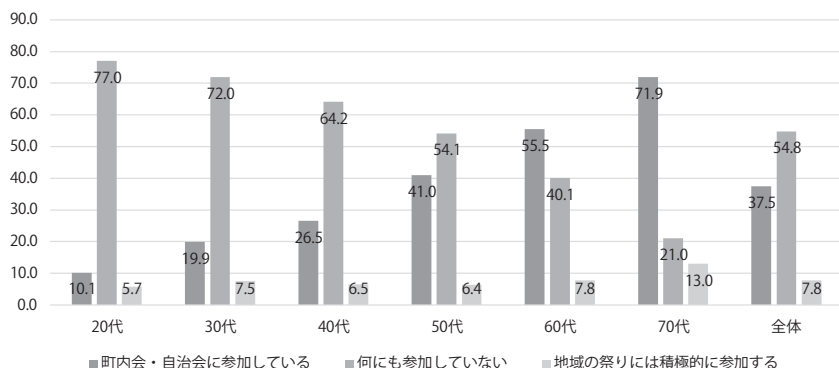


図14 町内会や地域の組織、地域の祭りへの参加状況  
(年代別, %, データ出所: 2022年6月調査)

日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——  
点とする山形の分布を示している。

この結果は、現在、地方都市が最も地縁共同体が保たれているのは地方都市である可能性を示唆しており、地域活性化を考える上で重要なヒントとなるかもしれない。

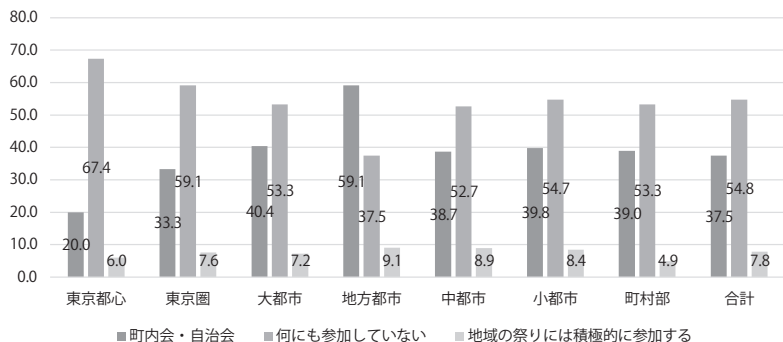


図15 地域の組織や団体への加入率  
(居住地域別, %, 複数回答, データ出所: 2022年6月調査)

また図16は居住地と近所づきあいの程度を見たものである。これによれば、東京都心部では突出して近所づきあいが少ないが、他の地域ではあまり大きな違いがない。そして、「時々立ち話をする程度」以上のつきあいをしていないとの回答は、ここでも、地方都市を頂点とする山形の分布となっている。

図17は、居住年数と近所づきあいの程度を見たものである。これによ

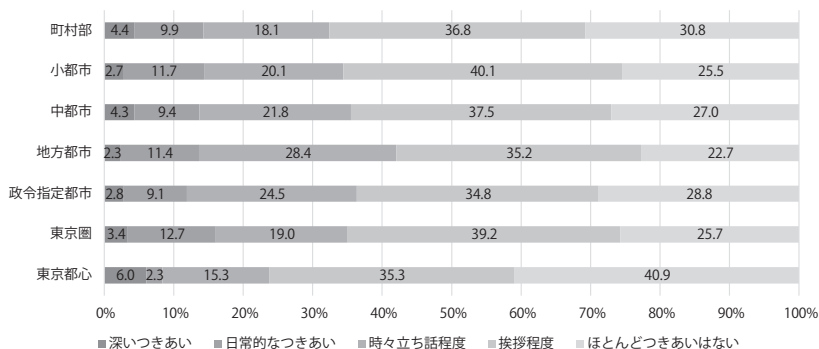


図16 居住地と近所づきあい (%, データ出所: 2022年6月調査)

れば、「1年以内」では突出して近所づきあいが少ないが、「10年以上」より長ければあまり大きな違いがない。むしろ、「子供の時からずっと」より「10年以上」住んでいる人の方が近所づきあいが密であるとも読み取れるのは興味深い。

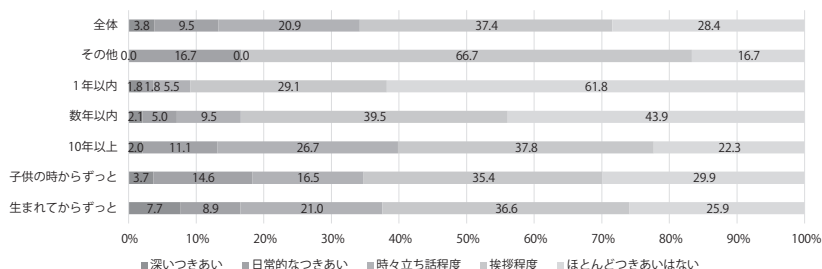


図17 居住期間と近所づきあい（％，データ出所：2022年6月調査）

## 8. 宗教とのかかわり合い

### 8.1 宗教意識

日本人は宗教をもたないとよく言われる。

実際、図18に示した2015年5月調査、2022年6月調査においても、「信じている宗教があるか」という問いに肯定的に答えているのは、それぞれ11.9%、11.8%と少ない。「信じているわけではないが、宗教に関する本を読むことはあるか」という問いに肯定的に答えている人は、23.2%から17.2%へと減少している。一方「宗教に関するものには近寄りたくない」との回答は、それぞ

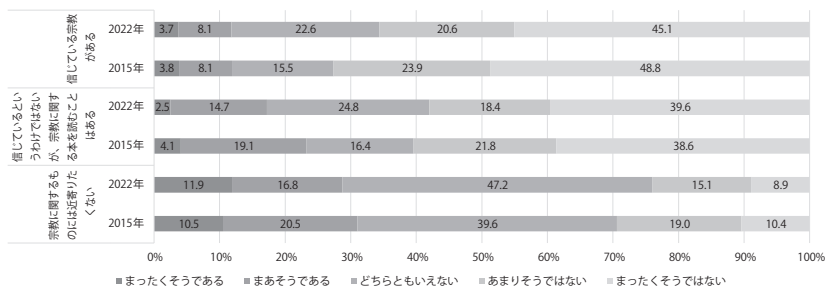


図18 宗教に関する意識（％，データ出所：2015年5月調査，2022年6月調査）

日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——  
れ30.1%，28.7%と高い値を示している。

## 8.2 無意識的宗教関連活動の状況

確かに、先にも見たように、現代の日本人の中で、「何らかの宗教を信仰している」と答える人は、少ない。

だがその一方、「あの世」があるとの感覚や、寺社詣でやおみくじなどの宗教関連活動については、2022年になるとやや減っているとはいうものの、肯定的な回答がかなり多い（図19）。

こうした振る舞いは、何か体系立った教義に則った信仰というわけではないが、生きている上での不安や悩みを和らげたり、行動を決めるときの隠れた指針として、気軽に行われているのだろう。（そもそも日本では、仏教も、称名念仏、専修念仏、踊念仏など、民間信仰に近いような形で、庶民に広められた経緯がある）。

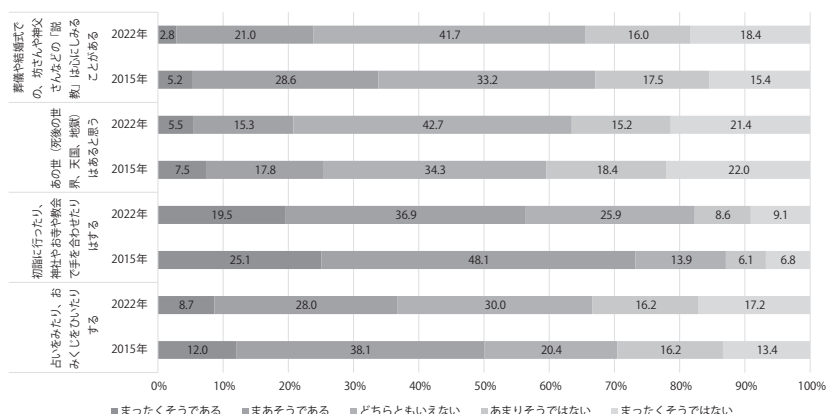


図19 無意識的宗教行動（％，データ出所：2015年5月調査，2022年6月調査）

## 8.3 常民倫理の現状

「超越的なもの」に対する畏れもまた、体系的な教義というより、民俗信仰と混淆した「人生訓」のような形で人びとに共有されてきたと考えられる。これを本稿では「常民倫理」と呼んでおこう。

なかでも、「お天道様」という「超越者」は、自然宗教における太陽、神道における天照大神、仏教における大日如来、キリシタンにおける大神デウスなどにも擬せられつつ、天道念仏なども含め、常民たちの生活に深く関わってきた。

日常的な戒めの言葉として、「お天道様は見ている」という言葉もしばしば使われてきた。国民的映画と呼ばれる山田洋次監督の『フーテンの寅さん』シリーズでも名台詞として記憶されている。最近でも、たとえば2018年に行方不明だった2歳児を発見し、一躍時の人となった尾畠春男氏の言葉としても注目された。『実用日本語表現辞典』では、「お天道様が見てる」は、「人間の悪事に対して、ほかの人間が誰も見ていなくても太陽はきちんと見ているのだから、どんな時でも悪事ははたらかぬべきだと説く語。お天道様がそのまま太陽を意味することもあれば、神や仏といったものの象徴として扱われることもある」と説明されている。

2022年6月調査では、この「お天道様は見ている」に対して共感するか否かを尋ねた。その結果、全体では、「聞いたことがない」との回答は1.5%ときわめて少なく、現在でもほとんどの人がこの教えを知っていることがわかった。また、半分以上の人がこの言葉に共感（賛同）している。現在も生きている「常民倫理」ということができるかもしれない。

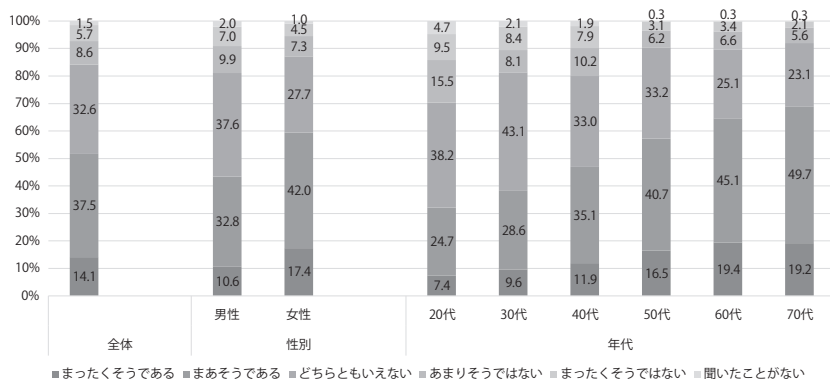


図20 「お天道様は見ている」に関する意識の性別・年代別分布  
(%, データ出所: 2022年6月調査)

日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——

無論、若い年代ほど共感する人は少なくなるが、20代でもおよそ3分の1が「そう思う」と答えている。70代では7割近くが賛同している。

この訓えについて、世帯収入別、居住地別、階層帰属別で見たのが図21である。世帯年収別では800万円以上の層で、居住別では大都市圏で、階層帰属意識では「中の上/中の下」で最も「そう思う」回答が多くなっていることも興味深い。

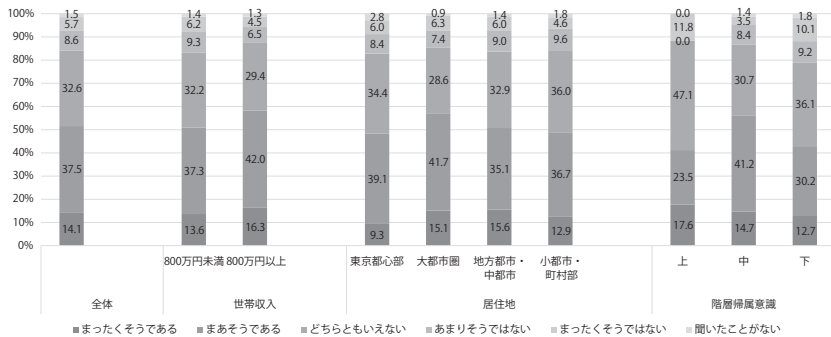


図21 「お天道様は見ている」に関する意識の収入別・居住地別・階層帰属意識別分布（％，データ出所：2022年6月調査）

## 8.4 常民倫理の世代変化

8.3節では、「お天道様は見ている」という常民倫理について検討した。しかし、伝統的な常民倫理には、必ずしも相互に整合性のない、さまざまな訓えがある。そこでそれらのなかでも聞くことが多いと思われるものについて、「そう思うか」を尋ねた結果を図22に示す。これによれば、支持する回答（「まったくそう思う」と「まあそう思う」を合わせたもの）の割合が多いのは、身を慎むべしとするもの（「ひとさまに迷惑をかけるな」、「分相応の生き方をせよ」など）、互酬性を重んじるもの（「お互いさま」「持ちつ持たれつ」など）、超越的存在を意識するもの（「因果応報」、「お天道様」、「ご先祖さま」など）などである。

またこれらの人生訓に対する支持は、高齢層から低年齢層へとおおむね線形に変化する傾向が見られ、多くは、高齢層で高く、若年層で低い。しかしいくつか例外もある。「目には目を、歯には歯を」「弱肉強食」「長いものに

は巻かれろ」などがそれに当たる。これらは「競争主義」あるいは「利己主義」と言うべき訓えであり、なぜこのような現象が見られるかについては、さらなる検討を要する。

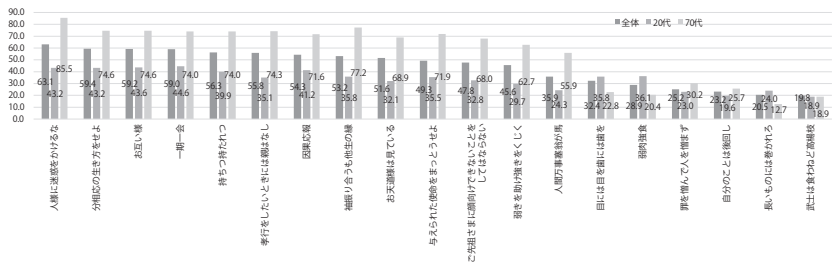


図22 代表的な常民倫理について「まったくそう思う」と「まあそう思う」の回答率 (%、データ出所：2022年6月調査)

8.5 常民倫理の因子分析

前節で見た常民倫理群について、因子分析を行った。その結果を表1に示す。また、回転後の成分行列を表2に示す。ここから、成分1を互酬因子、成分2を利他因子、成分3を利己因子と名付けた。

これらの因子について年代別に平均値をとったのが、図23である。ここからわかるのは、利他傾向については年代による違いがあまりないが、互酬傾向は年代が高くなるほど高くなり、利己傾向は年代が低くなるほど高くなる。50代が分水嶺となっているようである。ただしそれが、ライフステージの違いによるものなのか、コホートの違いによるものか、などの疑問については、今後さらに分析を行いたい。

表1 説明された分散の合計

成分	初期の固有値		
	合計	分散の%	累積 %
1	7.679	40.416	40.416
2	1.796	9.45	49.866
3	1.328	6.988	56.854



表2 回転後の成分行列

	成分		
	互酬	利他	利己
お天道様は見ている	0.612	0.355	-0.123
弱きを助け強きをくじく	0.643	0.361	-0.147
お互い様	0.778	0.133	0.073
因果応報	0.71	0.076	0.22
長いものには巻かれろ	0.018	0.39	0.676
罪を憎んで人を憎まず	0.156	0.737	0.063
目には目を歯には歯を	0.255	-0.029	0.728
武士は食わねど高楊枝	0.114	0.604	0.434
持ちつ持たれつ	0.76	0.185	0.134
一期一会	0.75	0.111	0.139
分相応の生き方をせよ	0.676	0.048	0.246
孝行をしたいときには親はなし	0.678	0.209	0.097
与えられた使命をまっとうせよ	0.684	0.346	0.048
自分のことは後回し	0.319	0.671	-0.022
人間万事塞翁が馬	0.454	0.486	0.063
人様に迷惑をかけるな	0.747	0.06	0.169
ご先祖さまに顔向けできない ことをしてはならない	0.688	0.289	0.122
袖振り合うも他生の縁	0.675	0.315	0.022
弱肉強食	0.087	-0.024	0.788

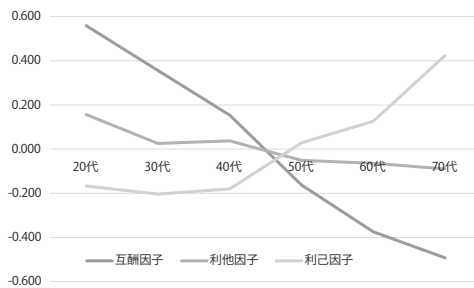


図23 各因子の年代別平均値 (値が小さいほど、その傾向が大きい)

## 9. 時間を超えて——〈死〉と〈生〉をつなぐ

冒頭にも述べたように、近代科学の勃興以来、人類は自らの力によって、自然環境はもとより、自らの身体さえ、合理的に制御することが可能であるとの信念に基づいて「進歩」に向かって邁進してきた。

しかし、人間という存在にとって最後まで残る「不思議」は、なぜどのようにして「私」というものが生成されたのか、なぜどのようにして「私」というものが最終的に不可避的に消滅するのか、という問い（わだかまり）であろう。歴史上人間たちは、社会的文化的な認識枠組みや制度によって、わだかまりへの応えとしてきた。

科学技術の進歩は、こうした伝統的な社会文化的装置に替わって、この根源的な問題に対応しようとしてきたが、果たしてそれは可能なのか。最終的に、人間を「不死」化するという解を主張する研究者もいるが、そのとき人間はどのように「不死」あるいはポスト・ヒューマンの社会に適応できるのだろうか。ややSF的にも聞こえるこうした問いに答えるためにも、「死生観」の問題をさらに深く検討していく必要があるだろう。

震災後、被災地を訪ね歩いたときに、何より心に突き刺さったのは、海の間際まで迫る、傾斜の急な山腹を埋め尽くす夥しい墓石群であった。その中には、この地を繰り返し襲った津波災害の死者たちの碑もひっそりとたたずんでいる。それらは、確かに哀しみの記憶なのだけれど、何かしら自分の存在が包みこまれるような安堵の気持ちもわいてくるのである。

歴史の中で、無数の人びとがそれぞれの想いを抱きながら死んでいった。それは、日本の何処でも、世界の何処でもそうであろう。例えば、東京都心の繁華な道でも、ふと目を凝らせば、死んでいった者たちがそこここに身を潜めている。海難事故、関東大震災、東京大空襲、戦死者たちの碑が、無名の死を死んだ無数の墓石がわれわれを見つめている。

1890年来日し、帰化した小泉八雲は、次のように書いている。「われわれ

日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——  
の行為は、ことごとく、われわれの内部にある死者の行為ではないか？われわれの衝動、われわれの性向、われわれの能力、われわれの弱点、勇猛心、怯懦、——みなそれは、…（中略）…いまは世にない無尽無数の死者がつくりあげたものではないか？（小泉1975：69）」

現代の私たちもまた、死者たちによって生かされている。

その一方、現代を生きているわれわれは、未来世界に生きる人びとにとっては〈死者〉たちあるいは先祖／祖先である。私たちがいま産出しつつある世界を基盤として、未来の〈生者〉たちは彼らの生活を営むことになる。W.ベンヤミンが言うように、「強風は天使を、彼が背中を向けている未来の方へ、不可抗的に運んでゆく。その一方ではかれの眼前の廢墟の山が、天に届くばかりに高くなる。僕らが進歩と呼ぶものは、（この）強風なの」で、私たちが積み上げた廢墟の山に、子孫たちは住むことになる。

伝統的な教えによれば、私たちは「ご先祖に顔向けができない」振る舞いを慎む義務があると同時に、「ご先祖になる」よう努めなければならない（柳田1946：19）。生きている人間は、〈死者〉たちと未来の〈生者〉たちを媒介する者たちなのである。

科学技術によって人間を含む生物たちの生と死が大きく変化する可能性の前に立って、伝統的な死生観もまた、改めて私たちに再考を求めている。それは、ポリオワクチンの開発者であるジョナス・ソークによる「私たちは良き祖先であるだろうか」との問いとも強く共振し、バウマン（2017=2018）やローザ（2005=2022）らが論ずる「時間からの疎外」の克服とも接続すると考えられるのである。

## 【謝辞】

本研究は、2015年度昭和会館研究助成ならびに2022年度昭和会館研究助成により遂行された。深く感謝する。

【参考文献】

- Bauman, Zygmunt, 2017, RETROTOPIA (1st Edition), Polity Press Ltd., Cambridge. (伊藤茂訳, 2018, 『退行の時代を生きる一人びとはなぜレトロトピアに魅せられるのか』 青土社)
- Bech, Ulrich & Beck-Gernshelm, Elisabeth, 2001, INDIVIDUALIZATION, Sage Publications Inc. (中村吉孝他・訳, 2022, 『個人化の社会学』 ミネルヴァ書房)
- Bellar, R. N., (堀一郎・池田昭訳, 1962, 『日本近代化と宗教倫理—日本近世宗教論』 未来社)
- Bellar, R. N., 1957, TOKUGAWA RELIGION. (池田昭訳, 1996, 『徳川時代の宗教』 岩波文庫)
- Berger, Peter L & Berger, Brigitte & Kellner, Hansfried 1973 The Homeless Mind: Modernization & Consciousness, New York: Random House. (高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳, 1977, 『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』, 新曜社)
- Chesterton, G. K., 1908, Orthodoxy. (安西徹男訳, 2019, 『正統とは何か』 春秋社)
- 土居健郎, 2007, 『「甘え」の構造 [増補普及版]』 弘文堂
- Elias, Norbert, 1982, UBER DIE EINSAMKEIT DER STERBENDEN (中居実訳, 1990, 『死にゆく者の孤独』 法政大学出版局)
- 遠藤薫, 2013, 『廃墟で歌う天使—ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』を読み直す』 現代書館
- 遠藤薫, 2014, 「〈生〉と〈死〉のシナジーを求めて——「高齢社会」再考」, 今田高俊 (編著), 2014, 『シナジー社会論—他者とともに生きる』 東京大学出版会
- 遠藤薫, 2016, 「現代人にとって「いのち」とは何か——生命倫理に関する意識調査結果から」『学習院法務研究』 第10号 (2016年1月), p.187-195
- 遠藤薫 (編著), 2019, 『学習院大学東洋文化研究叢書 日本近代における“国

- 日本社会における文化基層としての死生観とその変化——2015年／2022年意識調査結果から——  
家意識”形成の諸問題とアジア—政治思想と大衆文化』勁草書房
- 遠藤薫, 2021, 「〈絆〉から〈孤立〉へ——てんでんこの倫理と死者への想い」  
『Journalism』(朝日新聞出版) 2021年2月号, no.369, 50-57
- Giddens, Anthony, 1990, The Consequences of Modernity, Polity Press (松  
尾精文・小幡正 敏訳, 1993, 『近代とはいかなる時代か?——モダニティ  
の帰結』而立書房)
- 金井 清光/梅谷 繁樹, 2022, 『一遍語録を読む』法蔵館文庫
- 小泉八雲 (平井呈一訳), 1975, 『日本警見記 (下)』恒文社
- Krznaric, Roman, 2020 The Good Ancestor. (松本紹圭訳, 2021, 『グッド・  
アンセスター わたしたちは「よき祖先」になれるか? あすなろ書房)
- Kubler-Ross, Elisabeth, 1969, On Death and Dying. (鈴木晶訳, 2020, 『死ぬ  
瞬間—死とその過程について』中公文庫)
- 折口信夫, 1927, 「盆踊りの話」折口信夫, 1995, 『折口信夫全集2』中央公論  
社
- 松沢哲郎・林美里「死を弔う意識の芽生え?」『科学』2010年7月号 Vol.80  
No.7, 岩波書店 (<https://www.pri.kyoto-u.ac.jp/sections/langint/ai/ja/k/103.html>)
- Salk, Jonas, 1992, “Are We Being Good Ancestors?” in World Affairs: The  
Journal of International Issues, December 1992, Vol. 1, No. 2 (December  
1992), pp. 16-18.
- Rosa, Hartmut, 2005, Beschleunigung: Die Veränderung der Zeistrukturen  
in der Moderne, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main. (出口剛司監訳,  
2022, 『加速する社会—近代における時間構造の変容』福村出版)
- 島田裕巳, 2014, 『0葬——あっさり死ぬ』集英社
- 島蘭進, 2012, 『日本人の死生観を読む 明治武士道から「おくりびと」へ』  
朝日新聞出版
- Simmel, Georg, 1992, Soziologie: Untersuchungen über die Formen der  
Vergesellschaftung, Georg Simmel Gesamtausgabe, Bd.11, Suhrkamp (居

安正訳, 1994, 『社会学』(上・下) 白水社)

Walter, Tony, 2017, WHAT DEATH MEANS NOW: Thinking Critically about Dying and Grieving, Policy Press. (堀江宗正訳, 2020, 『いま死の意味とは』 岩波書店)

柳田國男, 1946, 「先祖の話」 柳田國男, 1990, 『柳田國男全集13』 筑摩書房  
山折哲雄, 1995, 『日本人と浄土』 講談社学術文庫